

2022. 7. 15 開催  
第 7 回 ACADEMIC CAFE  
「火に関わる自然環境と人の暮らし—地質時代と現在」

## ボルネオにおける環境改変と人—自然関係

文学研究科 教授 祖田 亮次

**概要** ボルネオ島は東南アジア島嶼部の中央に位置し、世界一の生物多様性を誇る熱帯雨林を擁している。そこに暮らす先住民は移動を繰り返しながら、焼畑や狩猟、採集、漁撈などに従事してきた。しかし、20 世紀後半以降、大規模な商業的木材伐採やプランテーション開発の波にさらされ、その生活・生業は大きく変化してきた。ボルネオはいわゆる人新世時代の環境破壊を象徴する場所となったが、そうした開発の進展の中で人々の生活の何が変わったのか、変わらないのか、あるいは今後の展開はどう予想されるのか、考えてみる。

キーワード 焼畑、プランテーション、火入れ、多生業性



会場の様子

### 1. はじめに

今回の共通テーマである「火」について考えるために、ここでは焼畑から話を始めたい。焼畑は、かつて日本も含め世界各地で行われていた農業形態で、現在でも熱帯域を中心に広く行われている。今回は、東南アジアのボルネオ島に焦点を当てた報告を行う。

ボルネオ島は東南アジアの島嶼部のほぼ中央に位置する島で、世界で 3 番目に大きな島とされる。世界一の生物多様性を持つとされており、熱帯雨林の保護・保全の重要性がうたわれている。

そこで行われてきた焼畑は生態環境的に極めて適格的な生業であることは、科学的に証明されている。それが環境破壊的農業として批判対象になったのは、多くの誤解に基づくものであった。ここでは、焼畑の本質とは何か、環境（森林）破壊の真の主体は誰か、その背景には何があるか、といった点について報告したい。

### 2. 焼畑の本質

ボルネオの内陸先住民が行う焼畑農業は、森林（多くは休閑二次林）を伐採し、火入れを行った後に、コメ等を播種するというものである。1 シーズン利用した畑は収穫後に放棄し、数年～数十年休閑させる。焼畑の面積は 1 世帯あたり 1 ヘク

タール前後の小規模なものである。火の管理は徹底されているので延焼を起こすことはない。「火入れ」という行為ばかりが目されがちだが、そ



れは焼畑の本質ではない。むしろ、休閑期間を置くこと、それによって雑草を排除するということ（労働量投下の軽減）。それは、森林の植生遷移を促すという意味でも重要である。森を焼くことが環境破壊につながるという短絡的な誤解や思い込みが、焼畑という生業への否定的な評価につながったと言える。

一方で、現地住民の生業とは無関係な、大企業によるプランテーション開発でも、開発過程で森



を焼くということが行われてきた。それは整地作業を軽減させるのが主要な目的である。アブラヤシのプランテーション開発では最低でも数千ヘクタール、場合によって数万ヘクタールを一気に焼く。ときに、大阪市と同規模の面積が一気に焼かれ、アブラヤシの単作地となるわけである。それは明らかに環境破壊的な行為と言えるだろう。

先住民が1枚の畑を焼くのと、企業が広範囲を焼き払うのとではまったく意味が異なるが、「焼く」という火入れの行為が同一視され、先住民が何百年にもわたって行ってきた環境適合的かつ循環的な生業が否定されるのはアンフェアであろう。

### 3. 内陸先住民の多生業性

焼畑は、単位面積当たりの生産性という点では、灌漑水田や常畑に対して劣っているが、労働投下量という観点で言えば非常に低く、極めて効率的な農業形態である。とくに、除草作業を必要としない点が、水田や常畑と比べて労働力の軽減に寄与している。ボルネオの事例で言えば、焼畑農業に投下する労働量は総計1か月程度で、年間のほとんどの期間は「農閑期」と言える。農閑期の間に行うのは、狩猟、採集、漁撈その他の生業で、20世紀末以降は出稼ぎ労働もそれに加わるようになった。

「焼畑民」というカテゴリー自体が、近代主義的な民族類型化の典型であり、そもそも焼畑に特化した民族というわけではなく、きわめて「多生業性」をもった人々であったと考える方が妥当であろう。

農業という土地生産性を重視する生業活動だけに依存するのではなく、世界有数の生物多様性を持つ森林資源をどう利用するかが、彼ら/彼女らの重要な生存戦略であった。狩猟や漁撈によって日々のタンパク源を獲得するだけでなく、希少な森林資源（野生ゴム、籐、各種植物油脂、ツバメ巢、香木、ダマールなど）を採集し、それを域外に輸出することで利益を得ることも少なくなかった。つまり、ボルネオの内陸社会は、森林の奥地で孤立した自給自足の世界であったわけではなく、少なくとも数百年前から世界市場と接続される形で地域社会を維持してきたのである。そうした人々を「焼畑民」とカテゴライズして「火入れ」という行為のみに注目して批判的に捉えるのは、あまりにも一面的であろう。

「焼畑民」にとっての焼畑は、一般に思われるほど生活にとって重要ではないかもしれない。むしろ、多生業な社会であることの意味を理解する必要があると思われる。この「多生業性」は、リスク分散という点でも重要な意味を持っていた。

こうした社会をどのように維持するのかという点は、地球環境との関係の上でも、もう少し議論されてもよいだろう。

### 4. 開発と保全のバランス

近年、ボルネオで急速に起こっている変化として、アブラヤシ栽培の拡大がある。数千～数万ヘクタールのプランテーション開発は、現地社会にとって極めて大きな影響を与えうる。ただ、こうした土地開発が即座にすべてを変えようとは限らない。各種調査から見えてきたのは、バランスの取れた開発と、従来型の生業活動との組み合わせによって、先住民社会においてバランスの取れた開発もありうるという点である（祖田 2022）。

いくつかの調査によれば、アブラヤシを導入した村落においても、休閒二次林や天然林を一定程度保全している場合は、アブラヤシという商品作物による現金収入を得ながら、従来型の狩猟採集活動も維持できていることが明らかにされている（Kato and Samejima 2020）。このような「多生業性」は、焼畑地・商品作物栽培地・休閒二次林（狩猟採集空間）といった、モザイク的な植生景観の維持によって成立しうるものであり、また、多生業の維持は、内陸先住民社会におけるリスク分散という意味で、今後も重要になると思われる。モザイク景観を維持するためには、開発と保全のバランスを、いくつかの空間スケールで議論する必要があると思われる。つまり、村落スケール、県/省スケール、あるいは流域スケールなどで、どこまで開発して、どこまで保全するか、そうした議論がこれまでほとんどなされてこなかったが、そろそろ真面目に検討しても良いのではないだろうか。

#### 参考文献

- [1] Kato, Y. and Samejima, H. 2020. The effect of landscape and livelihood transitions on hunting in Sarawak. In Ishikawa, N. and Soda, R. eds. 2020. Anthropogenic tropical forests: human-nature interfaces on the plantation frontier. Singapore: Springer, 277-313.
- [2] 祖田亮次 2022. 熱帯林の開発と環境問題. 佐藤廉也・中澤仁編『人文地理学から見る世界』放送大学出版会, 73-88.

#### 発表者紹介

1990年代半ばからボルネオ島を中心に東南アジアに通い、調査研究を行ってきた。その関心は、初期は農村-都市間人口移動や民族と政治との関係性であったが、その後、環境問題や災害現象に関する研究も行っている。

